

## あなたの前に開いておいた門

## 黙示録 3:7～13

今日はフィラデルフィアの教会に書き送られた箇所から一緒に学びたいと思います。この教会への手紙には他の教会と違って賞賛と指導だけで叱責がありません。お世辞なく神様は良い教会だと言っておられるんですね。とても魅力的な教会です。どこにその秘訣があるのでしょうか？ そんなことを思いながら聖書を見てゆきましょう。7, 8節をご覧ください。「また、フィラデルフィアにある教会の御使いに書き送れ、『聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持っている方、彼が開くと、だれも閉じることがなく、彼が閉じると、だれも開くことがない。その方がこう言われる——わたしはあなたの行いを知っている。見よ。わたしは、だれも閉じることができない門を、あなたの前に開いておいた。あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。』」

この中で「だれも閉じることができない門を、あなたの前に開いておいた。」とあります。このところをもう少し原文に近づけて直訳しますと、「わたしはあなたの前に、開かれた門を与えた」となります。キリストが、私たち信じる者に与えてくださるものがあります。それは「開かれた門」です。その開かれた門というのは、ただ自然に開いたとか、最初から開けっぱなしだったというのではなくて、キリストだけが開けることができる門であり、「この方が開けると、だれも閉じることができない」そういう門が、今も開かれた状態で、私どもに与えられているということです。たいへん不思議な恵みを語るみ言葉だと思います。

このような黙示録の言葉を読みながら、同時にふと思ひ起こされるのは、マタイ 16 章 18 節の主イエスの言葉です。主が弟子のペテロに向かって、「そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」と言われました。「よみの門」とは地獄の門、あるいは死の国の門と言ってもよいだろうと思います。

人はどんなに覚悟していても、愛する者の死はいつも突然やってきます。死の力が向こう側から飛び出して来て、われわれをガッと捕まえて、サッと連れて行ってしまふ。そしてその死の国の門が閉じられると、もうわれわれはどうしようもありません。泣いても叫んでも、愛する者の亡骸にどんなにすがり付いても、うんともすんとも言わない。「よみの門」というのは、そういうものだということです。ところが主イエス・キリストの教会には、よみの門でも打ち勝つことはできない力が委ねられていると言うのです。「わたしは、だれも閉じることができない門を、あなたの前に開いておいた。」黙示 3:8 これは主が開いてくださった門です。この「開かれた門」が与えられているからこそ、不安や恐れは確かにありますが私たちは根本的なところでは、もう死を恐れる必要はなくなりました。

昨年から 1 年ほどの間に、私たちの教会は、たいへんな数の教会の仲間の葬儀をしなければなりませんでした。それぞれのご遺族の方ほどではありませんがやはり牧師としてはとても悲しく、寂しい思いを持ちました。しかし教会で葬儀を行う度にいつも思うことですが、主が開いてくださった門のことを証しすることができました。この世の人生ですべて終わりではないのです。主イエス・キリストは死に打ち勝たれました。主イエスは初穂として復活してくださいました。麦は初穂が出てからぞくぞくと実りを迎えるように、主を信じる者が続いて復活するのです。よみの門は、もはや私たちを永遠に閉じ込める力を持つものではなくなったのです。

それに続けて、8 節後半で「あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。」と言われていています。このことばは「何とか、わたしのことばを守り、わたしの名を否まないぐらいの力はぎりぎり残っていた」ということではありません。つまり、もしあなたの力がもっと強かったら、余裕でわたしの言葉を守れたでしょう。それなのにあなたは、ぎりぎりの力で何とか成し遂げた。見上げたもんだ」という話ではないのです。原文を素直に直訳すると、こうなります。「あなたの力は弱い。そしてあなたはわたしの言葉を守った。そしてわたしの名を知らないと言わなかった」。

つまりフィラデルフィアの教会は、自分たちの力が弱いことを素直に認め、自覚していたのです。だからこそ、自分の前に開かれた門が与えられたときに、すぐに感謝して喜んでその門を通ったということです。自分の弱さを本当に自覚している人は開かれた門があれば喜んで感謝しながらその門を通ります。自分の弱さを自覚していない人は心の中で「余裕のある人と違ってこんな悪い条件で私は通ったのだ。だから私の方が偉い」と言って通ろうとするのです。「少しばかりの力や弱さ」は自分のプライドが許さないというわけです。つまり自分の弱さを素直に認められないのです。

イエス様が神の国の福音を話された時に多くの人々が集まってきました。その中には当時、あまり評判が良くなかった取税人、遊女、罪びとといった人たちもいました。彼らに対してイエス様は「あなたたちもうちょっとちゃんと生活して出直してきなさい」などとはおっしゃいませんでした。彼らにはすぐに「あなたたちの罪は赦されています。天国、だいじょうだよ」と言われたのです。なぜでしょうか？ 彼らのうち、少なくともイエス様のところに来る人たちは自分自身が罪深い者であることを深く自覚していました。そして自分の力で過去を挽回出来ないことも分かっていたのです。つまり誰かに救ってもらう、助けてもらうしか道はなかったのです。フィラデルフィアの教会の人たちも、自分たちの力が弱いことを知っていたからこそ、主の言葉を守らないわけにはいかなかったのです。このイエス様によりすがって救ってもらうしか道はないことを知っていたのです。言わば背水の陣です。だからこそ救い主イエスの名を、どんなことがあっても否定するわけにはいかなかったのです。主イエスはすべての人に「天国への門は開けておいたから、入りなさい」と勧めておられます。

さてその力の弱い者たちの群れに相對するように立つのが、9節に出てくる「サタンの会衆」です。創世記3章は、人間が初めてサタンの誘惑に負けたいきさつが書かれています。人間に罪が入り込むところですね。蛇が女に言い寄って、食べてはならない木の実を取って食べるようにそそのかしたという、たいへんよく知られた聖書の記事です。創世記3章1節に、「蛇は神である主が造られた野の生き物のうちで、ほかのどれよりも賢かった。」と書かれています。このことからもし蛇が賢くなかったら、エバも蛇の誘惑なんか相手にしなかったと考えることができます。しかし私達も、相当賢い人から、あなたもこうすれば賢くなれますよ、力を持つことができるようになりますよ、そして人々から賞賛を得ますよと言われると、そういう誘惑に私たちはいちばん弱いのです。

「あなたは力が弱い」「自分は力が無く、貧弱な者でしかない。」それが分かっていたら神様のところに行けば良いのです。そこに立ちさえすればよいのです。それなのになぜそこに立ち続けることができないのでしょうか。と言うよりも、そこから私たちを引っ張り出してしまうのが、サタンの誘惑なのです。「キリストの言葉なんか聞かなくて、人間として十分立派にやっつけていけるぞ。」「あなたはもっと力や能力があります。」サタンはそうやって「理想の私のイメージ」を大きくしたり焼き付けようとするのです。つまり神を目指しながら神から離れてゆくのです。そして結果としてはさらなる自分の弱さやみじめさを味わうこととなります。サタンのそのような誘惑に負けるとき、私たちは、主が大きく開けてくださっているいのちの門の存在を、その尊さを忘れるのだと思います。

ここで「サタンの会衆」と呼ばれているのは、具体的にはユダヤ人のことです。興味深いことに、「サタンの会衆」と訳されている言葉は、「サタンのシナゴグ」とあります。シナゴグというのはユダヤ人の会堂のことです。ところがそのユダヤ人の会堂が、「サタンの会堂」と呼ばれてしまっているのです。「見よ。サタンの会衆に属する者、すなわち、ユダヤ人だと自称しているが、実はそうではなく、嘘を言っている者たちに、わたしはこうする。」(9節)。ずいぶん激しい発言です。もともと、ユダヤ人というのは、神に選ばれた民です。神の選びがなかったら、つまり神の愛がなかったら、ユダヤ人の存在は最初からなかったでしょう。ところが新約聖書が伝えることは、その神に愛されたユダヤ人が、神ご自身に他ならない御子イエスを受け入れようとしなかったということです。そして、後の時代の教会、たとえばフ

フィラデルフィアの教会も、ユダヤ人の憎しみと戦わなければなりません。初代教会で問題が起ってくる大きな要素の一つはユダヤ教です。旧約聖書がユダヤ教の中心ですし、ユダヤ人は聖書をよく知っているし、行いも立派で社会的にも認められていました。ユダヤ教からするなら当時、キリスト教は亜流で正統ではなかったのです。聖書の知識もなければ社会的に立派なことをしているわけではない。そのような教会を、「あなたは少しばかりの力があつた、弱く貧弱だ」と言われるのです。フィラデルフィアの教会は、この言葉の意味が痛いほどによく分かっただろうと思います。そうだ、わたしたちは弱い。弱り果てている。けれども、そのような教会に、主はこのような約束を与えてくださいます。9節の後半です。

「見よ。彼らをあなたの足もとに来させてひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを知らせる。」これも非常に激しいものの言い方です。最後に勝つのは、神の愛なのです。そのときに、ユダヤ人たちも悟るようになる。ああ、そうだ、この人たちは、キリストの教会は、弱く、取るに足りない存在であるけれども神に愛されているのだ。そしてそのときこそ、ユダヤ人たちもまた、自分たちがなぜ神に選ばれたのか、なぜ自分たちが神に愛されたのか、その理由を思い起こすのです。

申命記7章6節以下には、宝石のように輝く御言葉があります。「あなたは、あなたの神、主の聖なる民だからである。あなたの神、主は地の面のあらゆる民の中からあなたを選んで、ご自分の宝の民とされた。主があなたがたを慕い、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実あなたがたは、あらゆる民のうちで最も数が少なかった。」申命記7:6-7「少なかった」は新共同訳では「貧弱であった」と書かれています。自分たちも、小さく貧弱なものであったのだ。〈そんな状態にもかかわらず〉というのではなく、むしろ弱かったからこそ、小さかったからこそ、貧弱であったからこそ神は選んで、これを愛し抜いて、だからこそ御子イエスを、われわれユダヤ人のためにも与えてくださったのだ。ですから、最後の日にユダヤ人たちがひれ伏すのは、キリストの愛の足もとにひれ伏すことになるのです。神の愛に打ち負かされて、その神の愛の足もとにひれ伏すのです。

さらにここで黙示録が「見よ、彼らをあなたの足もとに来させてひれ伏させ」と書いている理由は12節に「わたしは、勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱とする。」とあるように、私たちが神の神殿の柱とされるからです。このような神の神殿、すなわち新しいエルサレムを造るために、まず神の御子ご自身が、まさしく神の小羊として、十字架につけられ、お甦りにならなければなりません。そこに、よみの門も対抗できない、神の神殿が建ったのです。私どもひとりひとりが、その神殿の生きた柱とされる。何の力も持たなかったのに、いやそんな私どもだからこそ、神の神殿の柱とされて、神の愛の証しとさせていただいて、今ここに生かされているのです。そのようにイエス様の備えてくださった門に入る者に主はこうおっしゃいます。「地上に住む者たちを試みるために全世界に来ようとしている試練の時には、わたしもあなたを守る。」黙示録3:10　そして私たちのすべきことは何かというなら11節「持っているものをしっかり保ちなさい」とあるように、あちらこちら探し回るのではなく、弱さがあるからこそこの場で働いてくださる神様の守りを信じてキリストを証しし続けることではないでしょうか。